

## 表現環の構造について

東京教育大学大学院 岩田恵司

$G$  を有限群とし  $R$  を Dedekind domain とする。以後  $RG$ -加群については  $R$ -加群として有限生成, torsion free なものだけを扱う。 $RG$ -加群  $M, N$  について,  $M \otimes_R N$  は  $G$  の作用を  $g(m \otimes n) = gm \otimes gn$ ,  $g \in G, m \in M, n \in N$  とすることにより  $RG$ -加群になる, これを  $M \otimes N$  と書く。 $R$ -加群の同型類を  $[\ ]$  を付して表わす。この  $RG$ -加群の同型類を生成系とし, 基本関係  $[M] = [M'] + [M''] \mid M \cong M' \oplus M''$  で定義される  $\mathcal{P}$ -グループは 更に  $[M][N] = [M \otimes N]$  と定義することにより環の構造をもつ, これを群  $G$  の ( $R$ 上の) 表現環といい  $a(RG)$  で表わす。 $\mathbb{C}$ -algebra  $\mathbb{C} \otimes a(RG)$  を  $A(RG)$  で表わす。表現環の構造については Lam, Green, Conlon, 等によりいくつかの結果が得られているが, それらの概略をここに紹介する。

§ 1

本節を通じて,  $R$  は complete discrete valuation ring とし,  $P$  をその極大イデアル,  $\bar{R} = R/P$ ,  $p = \text{char } \bar{R}$ , とする。 $G$  の部分群  $H, K$  について, もし  $\alpha^{-1}K\alpha \subseteq H$  ( $\exists \alpha \in G$ ) ならば, このとき  $K \leq H$  と表わす。 $RH$ -加群  $L$  に対して  $RG$ -加群  $RG \otimes_{RH} L \in L^G$  と表わすことにする。

定義  $G$  の部分群  $D$  について,  $M \in L^G$ ,  $L: RD$ -module, なる様な  $[M]$  で生成される  $A(RG)$  の加法的部分群は, 更に  $A(RG)$  のイデアルになる, これを  $\alpha_D(RG)$  と表わし, 環  $\alpha_D(RG) / \sum_{H < D} \alpha_H(RG)$  を  $\omega_D(RG)$  と表わす。又これを  $\mathbb{Z}$  を複素数  $\mathbb{C}$  まで係数拡大したものを  $A_D(RG), \omega_D(RG)$  とする。

定理 [1] (Green [2])

$$\omega_D(RG) \cong \omega_D(RN(D)) \quad ; \quad \text{ring isomorphic}$$

(ここで  $N(D)$  は  $D$  の  $G$  における正規化群)

証明は省略するが, この同型対応は  $t([M]) = [M^G]$  と定義される transfer map,  $t: A(RN(D)) \rightarrow A(RG)$  から自然に誘導された対応で与えられる。

注意.  $D$  が  $p$ -部分群でない場合は  $\omega_D(RG) = 0$

補題 [2]

$F([M]) = [\bar{R}G \otimes_{R_G} M]$  により、 $\tau$  定義される自然同型準同型  $F: A(RG) \rightarrow A(\bar{R}G)$  を考える。  $\{ [X] - [X'] - [X''] \mid \exists 0 \rightarrow X' \rightarrow X \rightarrow X'' \rightarrow 0$   $\bar{R}G$ -exact sequence  $\}$   $\tau$  生成される  $A(\bar{R}G)$  のイデアル  $A'(\bar{R}G)$  とし、  $A'(RG) = F^{-1}(A'(\bar{R}G))$  とするとき

$$A(RG) = A_{(0)}(RG) \oplus A^{(1)}(RG)$$

とイデアル分解される。

証明 作りおきより  $A_{(0)}(\bar{R}G)A^{(1)}(\bar{R}G) = 0$  又  $A(RG)/A^{(1)}(RG) \cong G_0(\bar{R}G) \cong A_{(0)}(\bar{R}G) \cong A_{(0)}(RG)$ 。 作りおきより  $A_{(0)}(RG)A^{(1)}(RG) = 0$ 。準同型  $F^*: A(RG) \xrightarrow{F} A(\bar{R}G) \xrightarrow{\tau} G_0(\bar{R}G)$  は  $A_{(0)}(RG)$  の上での同型であることに注意すれば、  $\exists J_G \in A_{(0)}(RG)$  かつ  $F^*(J_G) = F^*(1_G)$ 、 $\therefore 1_G$  は  $A(RG)$  の単位元、 $\therefore J_G = J_G + (1_G - J_G)$  と直交冪等元への分解が得られる。(Q.E.D.)

$H \triangleleft G$  とする。準同型  $G \rightarrow G/H$  は自然に環準同型  $\tau: A(RG/H) \rightarrow A(RG)$  を引き起す。  $\tau(A_{(0)}(RG/H)) \subset A_H(RG)$  である。  $\tau(J_{G/H})$ 、 $(J_{G/H}$  は  $A_{(0)}(RG/H)$  の idempotent generator)、を互いに同じ記号  $J_{G/H}$  で表わすことにする。

補題 [3]

$J_{G/H}$  は  $A_H(RG)$  の idempotent generator である。

証明  $\bar{R}$  は代数的に閉じている、と仮定してよい。

証明には入る方に少し準備をしておく。Rが代数的に閉じて  
 いるから、Gの representation group  $\hat{G}$  が存在して、Gの上  
 のすべての twisted group algebra は  $\overline{R}\hat{G}$  の両側イデアル  
 として実現される。よって、つぎはその分解を

$$\overline{R}\hat{G} = B_0 \oplus \cdots \oplus B_m, \quad B_0 = \overline{R}G$$

とすると、これにより、 $\mathbb{C}$ -space  $\wedge$  の分解

$$A(\overline{R}\hat{G}) = A(B_0) \oplus \cdots \oplus A(B_m)$$

$$A_{(1)}(\overline{R}\hat{G}) = A_{(1)}(B_0) \oplus \cdots \oplus A_{(1)}(B_m)$$

$$A^{(1)}(\overline{R}\hat{G}) = A^{(1)}(B_0) \oplus \cdots \oplus A^{(1)}(B_m)$$

$$G_0(\overline{R}\hat{G}) = G_0(B_0) \oplus \cdots \oplus G_0(B_m)$$

が引き継がれる。又、 $\overline{R}\hat{G}$  の Cartan matrix は non-singular である。よって  $\gamma_i: A_{(1)}(B_i) \xrightarrow{\cong} G_0(B_i): \mathbb{C}$ -isomorphic と  
 なる。  $B_0, B_i$ -加群  $M, N$  は自然に  $\overline{R}\hat{G}$ -加群と見れるが、 $\overline{R}\hat{G}$ -加群として  $M \otimes N$  を考えたと  $M \otimes N$  は  $B_i$ -加群である。これによつて  $A(B_0), A_{(1)}(B_0), G_0(B_0)$  は各々、  
 $A(\overline{R}\hat{G}), A_{(1)}(\overline{R}\hat{G}), G_0(\overline{R}\hat{G})$  の  $\mathbb{C}$ -sub-algebra になる。よつて  
 分る。よつて  $A_{(1)}(\overline{R}\hat{G}), A_{(1)}(\overline{R}\hat{G})$  の idempotent generator を  
 それぞれ  $J_G, J_{\hat{G}}$  とすると  $J_G = J_{\hat{G}} \in A_{(1)}(B_0)$ ,  
 なる。よつて分る、これより、  $\sum J_G = x, \quad \forall x \in A_{(1)}(B_i)$ ,  
 である。

absolutely indecomposable RH-加群  $L$  をとり

$L$  の  $G$  における stabiliser  $\in S$ ,  $\{[M] \in A(RG) \mid M \mid L^G\}$  で生成された  $A_H(RG)$  の  $\mathbb{C}$ -subspace を  $A(L^G)$  とすると, 計算は省略するが,  $S/H$  の  $\bar{R}$  上の twisted group algebra  $B_L$  と  $\mathbb{C}$ -linear homomorphism  $F_L: A_H(RG) = \bigoplus_L A(L^G) \rightarrow A_{\omega}(B_L)$  が構成され, 次の条件を満足する。

$$F_L: A(L^G) \xrightarrow{\sim} A_{\omega}(B_L) : \mathbb{C}\text{-isomorphic.}$$

$$F_L(xy) = F_L(x) F_{\mathbb{1}_H}(y), \quad \forall x \in A_H(RG), \quad \forall y \in A_{\omega}(R^G/H)$$

従って  $\forall x \in A(L^G)$  について

$$\begin{aligned} F_L(x J_{G/H}) &= F_L(x) F_{\mathbb{1}_H}(J_{G/H}) \\ &= F_L(x) J_{S/H} \\ &= F_L(x) \end{aligned}$$

$$\text{故に } x J_{G/H} = x \quad (\text{Q.E.D.})$$

以上の結果にもとづいて次の定理が導かれる。

定理 [4] (Conlon [3])

$G$  の部分群  $D$  について

$$A_D(RG) \triangleleft A(RG)$$

$$A_D(RG) = A'_D(RG) \oplus A''_D(RG), \quad A''_D(RG) \cong W_D(RG)$$

$$\therefore A'_D(RG) = \sum_{D' < D} A_{D'}(RG)$$

証明.  $|D|=1$  のときは証明されている。  $|D|$  に関する帰納法で証明する。帰納法の仮定により  $A'_D(RG) \triangleleft A(RG)$  従って補題 [3] により  $D \nmid G$  の場合について証明すればよい。

$N(D) \subseteq G$  より  $A_D(R \cdot N(D))$  についての定理は成立。従って、

$$\begin{aligned} A_D(RG) / A'_D(RG) &= W_D(RG) \\ &= W_D(R \cdot N(D)) \\ &\cong A'_D(R \cdot N(D)) \oplus A(R \cdot N(D)) \end{aligned}$$

よって  $A_D(RG) / A'_D(RG)$  は identity element を持つ。

(Q.E.D.)

## § 2

$R$  は § 1 と同じ complete discrete valuation ring とする。また  $\tau$  は  $a(RG)$  の nilpotent element について調べる。  
 $D \triangleleft G$  とし、 $H \in D$  を含む  $G$  の部分群とする。

inclusion map  $i_H: H \hookrightarrow G$  は

$$\begin{aligned} \text{ring hom. } i_H^* &: G_0(R \cdot \mathcal{H}) \longrightarrow G_0(R \cdot \mathcal{G}) \\ I_H^* &: a_D(RG) \longrightarrow a_D(RH) \\ \text{add. hom. } i_{*H} &: G_0(R \cdot \mathcal{H}) \longrightarrow G_0(R \cdot \mathcal{G}) \\ I_{*H} &: a_D(RH) \longrightarrow a_D(RG) \end{aligned}$$

を誘導する。  $a_D(RH)$  は  $[M] \cdot [S] = [M_H \oplus S]$ ,

$M: R \cdot \mathcal{H}$ -加群,  $S: D$ -projective  $RH$ -加群,  $M_H: M \in H \rightarrow \mathcal{H}$  を通して  $RH$ -加群としたもの, とする。よって  $a(R \cdot \mathcal{H})$ -加群となるか, 更に  $G_0(R \cdot \mathcal{H})$ -加群でもあるかが分る。

補題 [5]

$\Delta = \{ \text{subgroup } H \text{ of } G \mid H \supset D, H/D, \text{ cyclic} \}$  とする  
とき。もし  $\Delta \ni \forall H$  に対して  $a_D(RH)$  が 0 以外の nilpotent element を持たないならば、 $a_D(RG)$  も持たない。

証明  $X^m = 0, X \in a_D(RG)$  とすると、 $\forall H \in \Delta$  に対して  
 $0 = I_H^*(X^m) = I_H^*(X)^m \in a_D(RH)$ 。従って  
 $X \in \bigcap_{H \in \Delta} \text{Ker } I_H^*$ 。さて  $\dots$

$$[G:D]^2 a_D(RG/D) \subset \sum_{H \in \Delta} \text{image } I_{*H}$$

であることに注意すれば

$$\begin{aligned} [G:D]^2 X &= [G:D]^2 \cdot 1_{G/D} X, \quad 1_{G/D}: G_0(RG/D) \text{ の単位元} \\ &= \sum_{H_j \in \Delta} a_j I_{*H_j}(y_j) X \\ &\quad \exists H_j \in \Delta, \exists y_j \in G_0(R \cdot H_j/D) \\ &\quad \exists a_j: \text{integer} \\ &= \sum a_j I_{*H_j}(y_j I_{H_j}^*(X)) \\ &= 0 \end{aligned}$$

従って  $X = 0$

(Q.E.D)

定理 [6] (Lam [5])

次の条件を満足する  $G$  の部分群  $H$  の存在を成る集合  $\mathcal{E}$  とする。

$$H^{(p)} \triangleleft H, \quad H/H^{(p)}: \text{cyclic}$$

ここで  $H^{(p)}$ :  $p$ -Sylow subgroup of  $H$

もし  $\exists H$  に対して  $a(RH)$  が 0 以外の nilpotent element をもたないならば,  $a(RG)$  は non-zero nil. el. を持たない。

証明  $|G|=1$  のときは明らか。  $|G|$  に向する帰納法で証明する。  $D \in G$  の任意の  $p$ -部分群とする。もし  $D \triangleleft G$  ならば帰納法の仮定により  $a(R \cdot N(D))$  は non-zero nil. ele. を持たない, 従って  $\omega_0(RG) (\cong \omega_0(R \cdot N(D)))$  も non-zero nil. ele. をもたない。  $D \not\triangleleft G$  の場合は  $\forall H \in \Delta$  とすると  $D < H^{(p)} < H$ ,  $H/p$  cyclic, 従って  $H \in \Omega$  と有り  $a(RH)$  は non-zero nil. el. をもたない。従って補題により,  $a_0(RG)$  故に  $\omega_0(RG)$  も non-zero nil. el. を持たない。従って定理 [4] により示すべし。 (Q.E.D.)

§ 3

本節では Burnside algebra の分解に誘導された, 表現環のイテアル分解を紹介する。

定義.  $RG$ -加群の category を  $\mathcal{M}(RG)$  とし

$\mathcal{L} = \bigcup_{D \in G} \mathcal{M}(RD)$  とする。  $M$  が  $RD$ -加群であることを  $T_M = D$  と表くことにする。  $\mathcal{L} \ni M, M'$  について  $M \cong \alpha M'$   $\exists \alpha \in G$  のとき  $M \sim M'$  と書き, 関係  $\sim$  による  $M$  の class を  $\langle M \rangle$  と表わす。  $\langle M \rangle; M \in \mathcal{L}$  で生成された free abelian group は, 生成元の間の積を



$$\langle M \rangle \langle N \rangle = \sum_x \langle M_{T_H \cap T_N} \otimes^x N_{T_H \cap T_N} \rangle$$

$x$  は  $G$  の  $(T_H, T_N)$ -両側剰余類の代表系を動く

と定義する:  $\langle \cdot \rangle$  により環になる.  $\langle \cdot \rangle \in$  Burnside ring と

い  $B(RG)$  で表わす.  $B(RG) = \mathbb{C} \otimes b(RG)$  とする.

$G$  の部分群  $H$  について  $\{ \langle M \rangle \mid T_H \leq H \}$ ,  $\{ \langle M \rangle \mid T_H \not\leq H \}$

で生成される  $b(RG)$  の additive subgroup をそれぞれ

$b_H(RG)$ ,  $b'_H(RG)$  とすると,  $\langle \cdot \rangle$  は  $B(RG)$  のイデール

である:  $\langle \cdot \rangle$  を分る.  $B_H(RG) = \mathbb{C} \otimes b_H(RG)$ ,  $B'_H(RG) = \mathbb{C} \otimes b'_H(RG)$

とす.

定理 [7] (Conlon [4])

$$\frac{b_D(RG)}{b_D(RG)} \xrightarrow{\sim} \frac{b_D(R \cdot N(D))}{b'_D(R \cdot N(D))}$$

: ring isomorphic

証明  $b_D(RG) \rightarrow b_D(R \cdot N(D))$  から誘導される additive hom.  $\gamma^* : \frac{b_D(RG)}{b_D(RG)} \rightarrow \frac{b_D(R \cdot N(D))}{b'_D(R \cdot N(D))}$  により,

$\gamma^*$  は base  $\varepsilon$  base に対応させているから additive isom.

( $\gamma \in M, M' \in M_L(R \cdot D)$  により)

$$\langle M \rangle \langle M' \rangle = \sum_{D \times D \subset G} \langle M' \otimes^x M \rangle$$

$$\equiv \sum_{D \times D \subset N(D)} \langle M' \otimes^x M \rangle \pmod{b'_D(RG)}$$

従って  $\gamma^* : \text{ring isomorphism}$

(Q.E.D.)

$M \in \mathbb{L}$  とするとき,  $T_M = S$ ,  $V_S = [N(S):S]$  とおくと,

$$\begin{aligned} \langle I_S \rangle \langle M \rangle &= \sum_{S \cap S' \subset G} \langle 1_{S'} \otimes^x M \rangle \\ &\equiv \sum_{S \cap S' \subset N(S)} \langle 1_{S'} \otimes M \rangle \pmod{l'_b(RG)} \\ &\equiv V_S \langle M \rangle \pmod{l'_b(RG)} \end{aligned}$$

これに注意して IDI に拘束する帰納法によりこの定理が証明される。

定理 [8] (Conlon [4])

$B_D(RG)$  は  $B(RG)$  のイデアル因子である。

特に Burnside alg. は

$$B_D(RG) = B'_D(RG) \oplus B''_D(RG), \quad B''_D(RG) \cong B_D(RG) / B'_D(RG)$$

$$B(RG) = \bigoplus_{D \leq G} B'_D(RG), \quad B'_D(RG) \cong B_D(RG) / B'_D(RG)$$

とイデアル分解される。

(証明略)

この自然に algebra epimorphism  $\psi: B(RG) \rightarrow A(RG)$   
 $\langle M \rangle \mapsto [M^*]$   
 が構成されるが、 $\psi: \tau$

$$A_D^*(RG) = \psi(B_D(RG)), \quad A_D^*(RG) = \psi(B'_D(RG)) \text{ とおく。}$$

このとき次が成立する。

定理 [9] (Conlon [4])

$$A_D^*(RG) = A_D^{*'}(RG) \oplus A_D^{*''}(RG)$$

$$A_D^{*'}(RG) \oplus A_D^{*''}(RG) \cong A_D^*(RG) / A_D^{*'}(RG) \cong A_D^*(R \cdot N(D)) / A_D^*(R \cdot N(D))$$

特に

$$A(RG) = \bigoplus_{D \leq G} A_D^*(RG)$$

証明

$\langle M \rangle = \langle M' \rangle = \langle M'' \rangle$ ;  $T_M = T_{M'} = T_{M''}$ ,  $M \cong M' \oplus M''$ ,  $\langle N \rangle = \langle N^p \rangle$

で生成された  $e(RG)$  の additive subgroup は ideal に

なる,  $\therefore$   $e \in j(RG)$  で表ゆすと  $\text{Ker } \psi = \mathbb{C} \otimes j(RG)$  で

あることが分る。  $\mathbb{C} \otimes j(RG) \cap B_D(RG)$  の生成元  $\in \text{mod } B_D(RG)$

で考えると  $\langle M \rangle = \langle M' \rangle = \langle M'' \rangle$ ,  $\langle N^p \rangle$ ,  $\therefore$   $\therefore$   $\therefore$

$T_M = T_{M'} = T_{M''} = D$ ,  $M \cong M' \oplus M''$ ,  $T_N \subset D$ ,  $\therefore$  ある, 全

$\langle$  同い元  $\rangle$   $\text{mod } B_D(R \cdot N(D))$  での  $\mathbb{C} \otimes j(R \cdot N(D)) \cap B_D(R \cdot N(D))$

の生成元である。従,  $\therefore$  定理 [7][8] により示されぬ。

(Q.E.D.)

## 文 献

- [1] C. W. Curtis and I. Reiner ; Representation theory of finite groups and associative algebras (Interscience 1962)
- [2] J. A. Green ; A transfer theorem for modular representations (J. of Alg. 1 (1964))
- [3] S. B. Conlon ; Relative components of Representations (J. Alg. 8 (1968))
- [4] S. B. Conlon ; Decompositions induced from the Burnside algebra (J. Alg. 10 (1968))
- [5] T. Y. Lam ; A theorem on Green's modular representation (J. Alg. (1970))